

関東平野における完新世初期の照葉樹林の進出・拡大

Advancement of warm temperate forest in Kanto Plain during early Holocene

西内 李佳^{1*}, 鈴木 茂², 遠藤 邦彦¹

Rika Nishiuchi^{1*}, Shigeru Suzuki², Kunihiko Endo¹

¹日本大学地球システム, ²パレオ・ラボ

¹Nihon Univ. Geosystem, ²paleolabo

1. はじめに

照葉樹は温帯に生育する常緑広葉樹の一つであり, 完新世の温暖化に伴ってその分布を拡大し, 現在関東地方を分布北限域としている。本発表では関東平野中央部から南関東に位置する埼玉県三郷市, 神奈川県川崎市, 千葉県館山市の3地点の沖積層コアを中心にして花粉分析結果を比較し, 縄文海進期における照葉樹林の進出・発達過程を考察する。

2. コア概要

埼玉県三郷市で掘削されたコアは全長55mで, 最下部は砂礫層にはじまり, 深度22.5-30.7mに9000~8000 cal.BPを示すマガキ礁がある。神奈川県川崎市の多摩川河口付近で掘削されたコアは全長78m, 最下部は砂礫層ではじまり, 下位から淡水, 海水, 淡水と堆積環境は変化し, 年代は14000~3000cal.BPにまたがる。千葉県館山市で掘削されたコアは全長約40m, 最下部の礫層から始まり, 下位から淡水, 海水, 淡水と堆積環境が変化し, 14000~3000 cal.BPの年代が得られている。

3. 照葉樹林発達過程の検討

埼玉県三郷市では, 落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が全体を通じて優占し, 最下部では最も多産する。コナラ亜属が徐々に減少してニレ属-ケヤキ属, エノキ属-ムクノキ属が増加し, 約9000 cal.BP, カキ礁の下部に照葉樹のコナラ属アカガシ亜属が出現し, ニレ属-ケヤキ属, エノキ属-ムクノキ属が減少するとほぼ同時にアカガシ亜属が分布を拡大する。

川崎コアでは, 三郷と同様にコナラ属コナラ亜属が全体を通じて優占し, アカガシ亜属の出現はわずかながら10000 cal.BP前後から見られるが, 6000 cal.BP頃から増加し, 3000 cal.BP頃から最も優先する。

館山コアでは, コナラ亜属が7000 cal.BP頃までは最も優先するが, 7000 cal.BP以後, アカガシ亜属, シイノキ属が圧倒的に支配的となる。

このようにアカガシ亜属の出始めは必ずしも南ほど早いとはいえない。一方, アカガシ亜属の急増時期は南が早い。また館山ではシイノキ属が顕著である。

このような推移と共に, ニレ属-ケヤキ属, エノキ属-ムクノキ属, クリ属, スギなどの産出状況を合わせて, 照葉樹林の進出・発達過程を中心に, 植生変遷の特徴を考察する。

キーワード:花粉,完新世,関東平野,照葉樹林,アカガシ亜属

Keywords: pollen, Holocene, Kanto Plain, Lucidophyllous Forest, Quercus cyclobalanopsis